

多様な媒体による郷土資料の保存と活用に関する 青森モデルの構築

山田 巖子¹葉山 茂²柴田彩子³・工藤 司⁴・山崎杏由⁵・小池淳一⁶
中田書矢⁷・小島孝夫⁸・山内潤紀⁹・福井敏隆¹⁰

はじめに

青森県に残る豊かな文化資源の発掘と位置づけを、地域未来創生センタープロジェクト研究として続けてきた。これらの調査成果から、青森県には、写真、映像、音声、民具などの多様な媒体による郷土資料が存在することが確認できたが、必ずしもその価値が知られておらず、最適な保存方法がとられているとは言いがたいことを確認してきた。本プロジェクトでは、既に発掘してきた郷土資料と関わる文化資源を活用するために、その媒体に適した保存と活用の方法について、地域の専門家と協同して調査研究する。

1 背景と目的

青森県の民俗資料の調査によって、廃館になった旧小川原湖民俗博物館の民具と写真資料、青森県の口承文芸研究者佐々木達司先生の遺稿と昔話の音声データ、野辺地立歴史民俗資料館蔵の民具などの存在を明らかにし、資料リストの作成や位置づけ、展示案の作成などをおこなってきた。また、民俗建築学会から、青森県黒石市で開催される津軽の冬の暮らしと住まいの関わりを考えるシンポジウムの登壇依頼があった。ここでは、冬の暮らしと住居に関わる習俗の報告が求められた。このような背景から、①民具 ②昔話の音声資料とその周辺資料 ③写真 ④無形の民俗 の最適な保存と活用を地元の関係者、学内、学外の研究者とともに考え、一つのモデル案を構築する。

2 実施内容

①においては三沢市と協同して小川原湖民俗博物館の旧蔵資料を国の登録有形民俗文化財指定を目指す。既に三沢市では民具の整理を終えており、弘前大学で整理した文字資料、バックデータと実際の民具をつきあわせながら民具の名称を同定する作業を支援する。5月18日に成城大学の小島孝夫氏とともに三沢市教育委員会を訪れ、関係者と今後の作業について話し合いを持った。また、青森県文化財保護課とも三沢市の旧蔵資料の現状について連絡、相談を行った。

弘前大学民俗学研究室に2015年度に寄託され、研究室で法量調査、リスト化して調査報告書を作成した後、三沢市に移管した旧蔵民具のうち、漁労関係のものが7月9日から8月28日に八戸市立博物館特別展「ナゲモノ拾いから始まった—ハマの民俗と文化財—」で展示され、弘前大学の学生たちの民具保

¹ 弘前大学人文社会科学部 ² 弘前大学人文社会科学部 ³ 弘前大学非常勤講師 ⁴ 三沢市教育委員会 ⁵ 野辺地町歴史民俗資料館
⁶ 国立歴史民俗博物館 ⁷ 鱒ヶ沢町教育委員会 ⁸ 成城大学 ⁹ ねぶた絵師 ¹⁰ 弘前大学国史研究会

存の活動が紹介された。

本年度が最終年である野辺地町の歴史民俗資料館での民具を活用した展示作業については、8月17日から20日まで、民俗学実習として実施した(写真1)。作業の様子は『東奥日報』8月29日に「学び生かして展示工夫 弘大生 歴史民俗資料館で作業」という見出しで紹介された。また、「人の一生」の展示で、過去の婚礼の祝い膳の復元を学生達が計画した。野辺地町の商家の協力を得て、記録を基に昭和20年代の婚礼料理を12月3日に復元し、調理の過程を記録した(写真2)。このときの様子は『東奥日報』12月7日に「昭和の婚礼料理再現 20年代 角鹿さん、祖母のメモ基に」という見出しで報じられた。他にも、不祝儀際の料理を中心とした郷土料理の教室に参加したり、資料館に寄贈された資料の追跡調査をしたりするなど、個別の調査も実施した。なお、野辺地町の調査資料の一部は、弘前大学資料館第31回企画展「ともにいること・ともに食べること—アフリカ・アジア・わたしたちの食」にも生かされている。

②においては、5月14日に国立歴史民俗博物館の小池淳一氏と五所川原市の故佐々木達司氏の自宅を訪れ、2021年度に弘前大学地域未来創生センターと人間文化研究機構広域連携型プロジェクト「日本列島における地域変貌・災害からの地域文化の再構築」で刊行した佐々木達司氏の遺稿を一般向けの書籍『あおり俗信辞典』として刊行するための編集作業を行った。この書籍は8月に青森文芸出版から刊行され、8月29日に『東奥日報』に藤田健次氏の書評が掲載された(藤田健次郎「民衆のひたむきな記録」)。音声資料については来年度に向け、外部資金獲得のための研究計画を作成した。また、青森県の昔話については、青森グラフ社刊『青森グラフ』(1月20日刊行)に「昔話は音の文化? 民俗学者山田巖子先生に聞く 昔話とは?」と題する記事が掲載された。

③写真資料については引き続き、旧小川原湖民俗博物館の旧蔵資料から、アルバムのうち、民俗資料を取り出してデジタル化作業を行った。これらの試みは、11月7日に開催された地域社会研究科地域公開セミナー山田巖子レクチャー「『ローカルなもの』と文化資源」で紹介した。

④民俗建築学会主催で10月15日に黒石市公民館で開催が予定されていたシンポジウムは、新型コロナウイルスの感染状況が収まらないため、中止となり、誌上シンポジウムを開催することになった。11月1日に一般社団法人日本民俗建築学会編・発行『2022年度日本民俗建築学会誌上シンポジウム津軽地方における建物の諸相—津軽の冬を通して住まいを考える』に山田巖子「津軽の冬の暮らしと火の民俗」と題する論考が掲載された。



写真1 野辺地歴史民俗資料館で展示作業中の学生たち



写真2 祝い膳の再現を調査する学生

